

## 阿波野青畝氏 概略

明治32年2月、俳人阿波野青畝は奈良県高市郡高取町大字上子島に生まれました。少年期から耳が遠く、中学から上の学校への進学を断念せざるを得ない絶望から、「万葉集」をはじめ、読書にふける毎日を過ごしました。これがのちの俳句創作に拍車をかけることになりました。

18歳の時に、「虫の灯に読み昂(たかぶ)りぬ 耳しひ兒」と詠んだといわれています。

畝傍中学時代に、郡山中学の英語教師・原田浜人に句作の指導を受けていて、郡山に来遊中の高浜虚子と出会い、師弟の間柄になりました。

のちに高浜虚子から、「耳の遠い児であるといふことが、勢い、君を駆って叙情詩人たらしめた」と言われるほどに耳疾そのものが、青畝の俳句にしみじみとした哀感をただよわせるに至っています。

昭和3年、青畝の叙情性が最もよく表現された一句が

葛城の 山懐(やまふところ)に 寝釈迦(ねしゃか)かな

です。葛城山は古くから多くの神話を持ち、また修験の聖地でもありました。葛城山が持つ神秘的な光景から写生でありながら、その句は無限の広がりを持っています。まさに俳句の聖人でありました。山口青邨の講演中の言葉から、水原秋桜子(しゅおうし)、山口誓子(せいし)、高野素十(すじゅう)と並んで四Sと称されるようになりました。

この句が誌名となり、昭和4年1月、郷里の俳人たちの要請で「かつらぎ」を創刊し、青畝は主宰となりました。

高取町には、また、4Sのもう一人である高野素十(すじゅう)も一時期住んでいました。素十は、一高から東京帝大を経て医学を修め、昭和9年から35年まで奈良県立医科大学の法医学教授を務めました。この間の一時期、昭和28年夏～昭和29年4月まで高取町大字観覚寺に住んでいて、ここから奈良医大に通っていました。

素十の俳句は、視覚を中心とした厳格なリアリズムを漂わせる「厳密な意味における写生」と虚子が評価した作風です。片や青畝の句は、しみじみとした情のぬくもりを感じさせます。

## 俳句の句意

「葛城の 山懐に 寝釈迦かな」  
(かつらぎの やまふところに ねしゃかかな)

郷里の高取からは葛城山がよく見える。寝釈迦の図は、実際には葛城山の山腹にある寺の中にあるが、まるで葛城山腹に寝釈迦が抱かれているがごとく思える。

「虫の灯に 読み昂ぶりぬ 耳しひ兒」  
(むしのひに よみたかぶりぬ みみしひご)

幼い頃よりの耳疾でよく耳が聞こえない。秋虫の音を聞きながら本を読みふけている「耳しひ兒」それは私なのだ。

「供齋 眼耳鼻舌身 意も無しと」  
(そなえいも げんじびぜっしん いもなしと)

戦時中のこと、長円寺の仏様に供えてあるさつま芋を住職に頂いて、お腹が減っていて、全身で味わって、全身でおいしかったと喜んだ。

「満山の つぼみのまゝの 躑躅かな」

(まんざんの つぼみのままの つつじかな)

これから躑躅の花が、一杯に咲こうとしています。

「飯にせむ 梅も亭午と なりにけり」  
(めしにせむ うめもていごと なりにけり)

上京のついでに梅見の誘いをうけた。東京を離れて多摩川の長い堤を、どういように歩いたかは覚えていない。不便な土地へひっぱられ、見るとあちこちに農家があり畑に梅が咲いている。畑に籾殻などが敷いてありその上を踏んで行くと、見晴らしのきく場所に粗末な置床几をちらしてある。数人の客が甘酒を飲んで遊んでいる。句を作るべく、私は梅の下枝をかいぐったりする。足が重くなる。亘(さ)え解けの柔らかい土がひつつくからだ。日はすでに頭の上にあって正午になっている証拠だ。なんとなしにひもじい気持が催して、飯を食う所がないかと人に問いたくなかったのである。